

Andenken

追想

Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Takashi Yahaba

テキスト編集・翻訳・注釈：矢羽々崇

## Andenken

Der Nordost wehet,  
Der liebste unter den Winden  
Mir, weil er feurigen Geist  
Und gute Fahrt verheisset den Schiffern.  
Geh aber nun und grüsse  
Die schöne Garonne,  
Und die Gärten von Bourdeaux  
Dort, wo am scharfen Ufer  
Hingehet der Steg und in den Strom  
Tief fällt der Bach, darüber aber  
Hinschauet ein edel Paar  
Von Eichen und Silberpappeln;

Noch denket mir das wol und wie  
Die breiten Gipfel neiget  
Der Ulmwald, über die Mühl',  
Im Hofe aber wächst ein Feigenbaum.  
An Feiertagen gehn  
Die braunen Frauen daselbst  
Auf seidnen Boden,  
Zur Märzzeit,  
Wenn gleich ist Nacht und Tag,  
Und über langsamen Stegen,  
Von goldenen Träumen schwer,  
Einwiegende Lüfte ziehen.

Es reiche aber,  
Des dunklen Lichtes voll,  
Mir einer den duftenden Becher,  
Damit ich ruhen möge; denn süß  
Wär' unter Schatten der Schlummer.  
Nicht ist es gut,  
Seellos von sterblichen  
Gedanken zu sein. Doch gut  
Ist ein Gespräch und zu sagen  
Des Herzens Meinung, zu hören viel  
Von Tagen der Lieb',  
Und Thaten, welche geschehen.

## 追想

1 北東の風が吹く  
私にとって  
最愛の風だ 火のような心と  
よき航海を船人たちに約束するから。

5 しかし今は行け そして挨拶してくれ  
うるわしのガロンヌ川に  
そしてボルドーの庭にわに  
そこでは するどい岸边を  
小径が延び 流れのなかに

10 深く小川が落ちる しかしその上では  
かしわと白楊（はくよう）の  
高貴な一組が遠くを眺めている。

それがまだよく思い出される　そしてどんなに  
幅の広い樹冠を　ニレの森が  
15　水車の上に傾けるか  
だが　中庭にはイチジクの木が育つ。  
祝いの日に行く  
かの地の褐色の女たちが  
絹の大地を  
20　三月の  
夜と昼が同じになるとき  
そしてゆったりとした小径を  
黄金の夢で重くなって  
眠りへと誘うそよ風が行く。

25      かし   手渡してくれ  
          暗い光に満ちた  
          香り高い盃を   だれか   私に  
          憩うことができるように。というのも甘美なのは  
          木陰でのまどろみだろうから。

30      よくないのは  
          死する思いに満たされて  
          心を失うこと。しかしよいのは  
          語らい   そして心の思いを  
          口にすること   愛の日々について

35      そしてかつてあった行いについて  
          多くのことを耳にすること。



## 編集注記

## 成立

1801年12月、ヘルダーリンは南フランスのボルドーに向けて出発する。同地に住むハンブルク領事にしてワイン商のマイアー家での家庭教師の職に就くためである。1802年1月末に、ヘルダーリンはボルドーに到着した。ボルドーは国際的な貿易港として栄えており、その様子が詩に反映している。しかし5月には家庭教師の仕事を辞める。帰路、パリ経由で6月上旬に国境を通過し、精神的にも肉体的にもぼろぼろの状態でシュトゥットガルトの友人の前に、そしてニュルティンゲンの母親の前に姿を現した。6月30日付の友人イザーク・フォン・ジンクレア（1775-1815）からの手紙で、かつての家庭教師先の恋人ズゼット・ゴンタルト（1769-1802）が6月22日になくなったことを知らされる。彼の精神状態にとっては、大きな負担となったに違いない。同年秋、友人カシミール・ウルリヒ・ペーレンドルフ（1775-1825）に宛てた手紙のなかで、「魂がいくどか揺すぶられ、動かされた後で、自分をしっかりと立て直すことが必要だった」と記している（StA VI, 433: MA I, 921）。

「追想」の成立は、ボルドーからの帰還以後から、おおよそ1805年前後、もっとも遅くとも、ヘルダーリンが精神病院に強制的に入院させられる1806年9月までの間と推測される。

詩のテキストは、おそらくジンクレアの手を経てレオ・フォン・ゼッケンドルフ（1775-1809）にもたらされ、その『1808年詩神年鑑』に「パトモス（Patmos）」「ライン川（Der Rhein）」とともに発表された。なお、前年の『1807年詩神年鑑』には、「秋の祝い（Die Herbstfeier）」（＝「シュトゥットガルト（Stuttgard）」）、「放浪（Die Wanderung）」、「夜（Die Nacht）」（＝「パンと葡萄酒（Brod und Wein）」第1節）が発表されている。掲載されている他のほとんどの詩の作者名がイニシャルだけなのに比して、ヘルダーリンはHölderlin. と姓が明記されている。ヘルダーリンの了解があったかは不明であるが、誤植などの多さを考えると、彼が校正稿に目を通したとは思えない。

詩の手稿は、最終第5節のみが残されており、同じ紙にはドナウ川のことである「イスター（Der Ister）」の一部が書かれている。第1～4節については、ゼッケンドルフの『1808年詩神年鑑』での印刷版を参照せざるを得ない。

## 第1～4節について

『1808年詩神年鑑』に発表された際には、「追想」に限らず非常に多くの誤植が見られた。「追想」に関して研究者や編者が一致して誤植とみなすのは、次の箇所であり、これに従って修正した。

誤 正

14行: Eicheln（どんぐり）⇒ Eichen（かし・かしわ）

30行: Licht（光）⇒ Nicht（～でない）

37行: Ballamin（ベラミン）⇒ Bellarmin（ベラルミン）

46行: Most（ぶどう果汁）⇒ Mast（[船の]マスト）

51行: lustigen（楽しい）⇒ luftigen（風強い）

さらに誤植を疑われる箇所は、次の2箇所である。どちらでも意味が取れるので、そのまま印刷時のものを採用した。

印刷時 可能性

19行: seidenen (?) ⇒ seidnem (?) 絹の大地へ」という方向か、「絹の大地で」という場所か？

28行: dem Gefährten (?) ⇒ den Gefährten (?) 「伴」は単数ではなく複数か？

その他、ヘルダーリンであれば4行 verheisset は verheißet、5行目 grüssse は grüße、28行 süss は süß と綴ったことが予想されるなど、出版時の変更も想定されるが、そのままとした。

## 第5節の再現について

「追想」で手稿が残されているのは、第5節だけである。冒頭の詩テキストでは、手稿に残された語句のうち、詩の生成を理解し、日本語訳を作るうえで重要と思える語句を残した。それに対して次の写实的転写では、手稿上に現れたすべての字句を再現している。抹消線は詩人自らが抹消線を引いた箇所、網かけの部分は、抹消線が引かれているわけではないが、放棄されたとみなすことのできる語句（ヴァリエント）である。網かけも抹消線もない部分は、ヘルダーリンが最終的に残した判断できる字句である。

なお同手稿は、カラー版で Deutsche Digitale Bibliothek（URL: <https://ausstellungen.deutsche-digitale-bibliothek.de/aufbrueche-abbrueche-hoelderlin/items/show/6>：閲覧日2025年5月31日）にて閲覧可能である。次ページの図1はその部分。

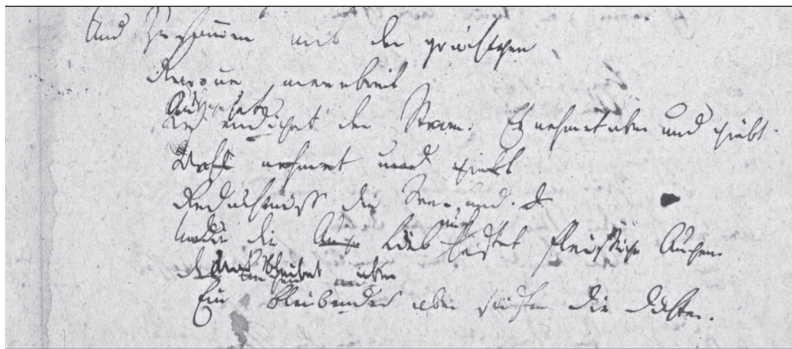


図1（FHA 7, 324より引用）：第5節手稿の最後の部分。次ページの写实的転写では、すべての行間が等間隔になっているが、実際には隙間に書き込むようになっている部分も多い。最終行の冒頭では、最初に Ein Bleibendes aber 「しかしとどまるひとつのものを」と書かれ、ついですぐ上（書かれてすぐに抹消線が引かれたと考えられる1つ前の詩行にかかわる Die Augen au[auch] 「眼も」の位置）に、少し濃いめのインクで Was bleibt aber 「しかしとどまるものを」が読み取れる。12行構成と判断した根拠となる9行目は、当初の Wohl nehmet und giebt に断続的な抹消線が引かれ、真横にはスペースがなかったために、斜め上のスペースに最終的な語句となる Es nehmet aber und giebt が書き込まれている。

写实的転写 (詩テキストとして構成した部分以外の文言も再現している)

Nach Indien sind die Fr<eunde>  
Männer [= Männer]  
Die Freunde gezogen:  
Nun aber sind zu Indiern  
gangen  
Die Männer gezogen;  
Dort an der luftigen Spitze'  
Fernhin, wo sich endiget  
sich endiget  
Meerbreit der Strom.  
Traubenbergen,  
An m n Rebenlande wo  
Des Rebenlandes herab  
Die Dordogne kömt [= kommt],  
Und Z[= z]usāmen mit der prächtgen Garonne  
Meerbreit  
Ausgehet  
Sich endiget der Strom.  
Es nehmet aber und giebt  
Wohl nehmet und giebt  
Gedächtniß die See. und Ð  
auch /  
UndDie die Auge Lieb heftet fleißige Augen.  
Was bleibt aber  
Die Augen auf[ch]  
Ein Bleibendes aber stiften die Dichter.

抹消線 = 詩人による抹消

(単語に水平に引いて抹消している場合のほか、最初の3行は斜線1本で抹消)

網かけ = 抹消線が引かれているわけではないが、放棄されたとみなすことのできる語句 (ヴァリエント)

< > = 編者による補足/仮説

(ここでは書きかけのFrを、斜め下にあるFreunde「友ら」から推測してFr<eunde>に)

[ ] = 編者による説明的な読み

(ここでは子音mやnの上に書かれた線がmmやnnであることを示す)

参考 第5節 (11行構成と12行構成)

ゼッケンドルフ版

[...]

8 Ausgehet der Strom. Es nehmet aber  
9 Und gibt Gedächtnis die See,  
10 Und die Lieb' auch heftet fleisig die Augen,  
11 Was bleibt aber, stiften die Dichter,

今回のテキスト

[...]

8 Ausgehet der Strom.  
9 Es nehmet aber und giebt  
10 Gedächtniß die See,  
11 Und die Lieb auch heftet fleißige Augen,  
12 Was bleibt aber stiften die Dichter.

最終節を11行として構成するのが一般的ななかで、あえて12行とする理由は、ヘルダーリンの後期詩における明確な構成意志があるためである。多くの後期詩において、節ごとの行数は一定であることがほとんどである。「追想」では、第1～4節が12行構成であり、第5節も同じと考えてよいであろう。また、手稿を見ると、当初の段階では、Wohl nehmet und giebt / Gedächtniß die See と「海が記憶を取り与える」ことが2行で表されている。手稿を見る限り、Es nehmet aber / Und gibtでと行またぎとする根拠は見当たらない。むしろ、スペース上の理由で1行書きできる、1行斜め上のSich endiget der Stromの横にある空白部分に書いたとみなしてよいだろう。

また、この第5節は、インド人たちのもとへ行く男たち (1～2行)、2つの川が合流して海へと注ぐ光景 (3～8行)、そして3つの箴言 (9～12行) という三部構成となっている。この構成を顧慮すると、第9行が独立しているほうが自然である。

概要紹介

タイトルのAndenkenは「追想」や「回想」と訳すのが一般的だが、an-には「～に寄せて」という意味があり、denken「思う、考える」とともに、「思いを寄せること」でもある。特に死者であったり、その場にいない、離れたところにいる人に思いを馳せるニュアンスが強い。動詞のかたちandenkenは実際には使われることはないに等しいが、ここから派生した名詞にはAndachtがあり、「黙想」や「帰依」という意味がある。つまりAndenkenは、内省的で、ある種の敬虔さを伴う「追想」なのである。

後期の作品群のなかで、「追想」はヘルダーリン個人の体験を色濃く反映しており、神話的な文脈をはっきりと示さない点で、他の後期詩と一線を画している。そのため、



20世紀初頭に論考や全集編集を通してヘルダーリンの価値を広く知らしめたノーベルト・フォン・ヘリングラート（1888-1916）は、「追想」を「より狭い意味での抒情的な詩」（PA II）というジャンルに入れた。後にバイスナー版を編集したフリードリヒ・バイスナー（1905-1977）は、「祖国の歌」というバイスナー独自の設定で後期自由律詩を包括したジャンルに入れている。このジャンル名は、ヘルダーリンは出版者フリードリヒ・ヴィルマンズ（1764-1830）に宛てた1803年の書簡内で使った言葉に由来する、そこでは、「愛の歌」の「いつも疲れた飛翔」に、「祖国の歌の高尚で純粋な歓呼の声」とフリードリヒ・ゴットリーブ・クロップシュトック（1724-1803）の叙事詩『救世主（Messias）』（1749-1773）や頌歌に見られる「預言的なもの」が対置されている（StA VI, 436）。「追想」という詩は、単に「より狭い意味での叙情的な詩」に限定できないし、「高尚で純粋な歓呼の声」とも異質である。そのどちらのジャンルにも入りきらない、逸脱する要素を含んでいる独特な詩として位置づけられる。

具体的な伝記的な事実としては、フランスのボルドーで家庭教師としての職に就くために1801年12月にドイツを出発し、1802年前半にボルドーに滞在し、職を辞めた後にパリ経由で帰国するまでのヘルダーリンの体験が反映されている。全5節の詩のなかで、特に前半では彼のボルドー滞在の経験が明確に反映した風景が歌われ、後半でも、国際貿易港ボルドーで詩人が感じ取ることのできたであろう、遠く航海する人びとの様子や思いが反映されている。そうした「抒情的な」要素が濃厚な前半部分に対して、後半部には箴言的な表現が散見され、手紙の言葉にある「預言的なもの」を思わせる。

そこでは特に、女性たちの領域、舟人たちの領域、そして詩人たちの領域に焦点が当てられる。同時に、詩ではそうした人びとの様子が描かれるだけでなく、人びととの語らいや想起の意義、そしてそうした言葉から生まれる詩と詩人たちの意義が中心的なテーマとして歌われる。

前半部では、mir「私にとって」という言葉が特徴的であり、いわば私的な語りの要素が強い。後半部では、「私」はテキストの表面には登場しなくなり、箴言的な表現が中心となる。それは最後の「だがとどまるものを打ち建てるのは詩人たちだ」という言葉で頂点に達する。

この詩は哲学者マルティン・ハイデガーの解釈（1943年）が大きな転機となった（Heidegger <sup>2</sup>1951a, <sup>2</sup>1951b）。それ以前は、ヘルダーリン個人の体験が歌われた詩とみなされ、抽象的な表現が多用される後半部は彼の狂気の証と捉えられていた。ハイデガーの哲学的な読みは、後半部に詩の意義を認め、哲学的な解釈への道を開いた。さらにフランス人研究者ピエール・ベルトーによるヘルダーリンの政治的な活動に焦点を当てた研究が発表された1960年代後半からは、社会学的な読解も進められた。

## 注釈

### 第1節

#### 1行 北東の風

語り手はおそらくドイツにおり、北東の風は南フランスのボルドーへと続く。さらに

は、ボルドーから南西方向にあるアメリカ大陸へと向かうのに「よき航海」をもたらす風である。第5節で「男たち」は「インド人のもとへ」と向かう。このインドは、新大陸アメリカを指している。19世紀中葉までの航海では帆が基本的な推進力のため、風向きは航海のための重要な要因だった。「北東の風」は、「次善のもの（Das nächste Beste）」では、「鋭く吹きながら鳥たちの目を覚ます」風と言われる（StA II, 238; MA I, 420）。

#### 3～4行 火のような心と／よき航海を船人たちに約束するから

その北東の風は「私にとって（mir）」もっとも愛しい風だと呼ばれる。この個人的な表現は、詩の前半部で特徴的である。

「火のような心」は、「炎の精神/精霊（der feurige Geist）」の意識である。何を指すのかは明確ではないが、遠いアメリカまでの航海などにあたって心を奮い立たせる風だからであろうか。レイタニは太陽の光を指すとする（TL, 1538）。なお、「精神/精霊」に相当するギリシア語はpneumaであり、風を意味する。さらに北東風に乗れば、ヨーロッパからアメリカ大陸までの航海は追い風となり、「よき航海」となる。

#### 5行 しかし今は行け そして挨拶してくれ

「しかし（aber）」は、ヘルダーリンの詩をしばしば解釈した哲学者マルティン・ハイデガーによれば、「追想」における中心的な言葉である。それは、「まどろみ」と「覚醒」のあいだで揺れる精神を覚醒させるような働きを担う。

行って挨拶するのは、詩のなかの「私」の願いを受けた「北東の風」である。gehenはこの詩の中心的な動詞であり、「北東の風」が行き、第2節では「褐色の女性たち」が行き、第4節では「源へ行く」ことが語られ、第5節では「男たち」が「インド人たちのもとへ」行き、川が海へと流れ行く（ausgehen）。

grüßenは、基本的な意味は「挨拶する」であるが、他にも「よろしく伝える」、さらに古義としては「祝福する」という意味もあり、それらが共鳴している。

なおこの部分は、ローマの詩人オヴィディウスがローマを追放され、黒海沿岸のトミス（現ルーマニアのコンスタンツァ）に向かう途中で書いたとされる書簡にある「我が書よ、行け、そして私の言葉でうるわしの場所たちに挨拶してくれ」（『悲しみの歌』）を踏まえているとされる（Hirsch 2008/2009, 254）。ドイツ語では、geh と grüße、次行のGaronneが頭韻となっており、gの強い音がまさに覚醒を思わせる。

ジャン＝ピエール・ルフェーブルによれば、ガロンヌ川、ボルドーの街と庭を一望できる視点は、ガロンヌ川左岸にある街の中心部とは反対側のガロンヌ川右岸にあり、街の北東部に位置する標高90メートルのロルモンの高みからの眺めだという（Lefebvre 2020, 56）。

#### 6行 うるわしのガロンヌ川

第5節でも登場するガロンヌ川は、ハンブルクなどと同様の河川港であるボルドーを、弧を描くように貫流している。ガロンヌ川はボルドーの約20キロメートル下流でドルド

ーニュ川と合流し、ジロンド川となって大西洋に注ぐ。こうした地誌的な事実以上に重要なのは、この川が「うるわしの (schön)」と「光り輝く (prächtigt)」(第5節) という形容がついていることである。この2つの形容詞の語源には「光」があり、ガロンヌ川は光や輝きのイメージで語られている。

## 7行 ボルドーの庭にわ

一般的な綴りはBordeauxだが、ここではBourdeauxという古風な綴りが選ばれている。発音も「ボ」より「ブ」といくぶん重々しい音になる。ただしヘルダーリンは手紙などでBordeauxと綴っており、筆写時の誤りや印刷時の誤植、もしくはジंकレーアかゼッケンドルフによる修正の可能性もある。18世紀後半になると、ボルドーは大西洋に開かれたフランスの国際貿易港として重要な位置を占めていた。なお、「庭にわ」は、家々の庭とも、川沿いに広がるワイン畑 (Weingärten) とも理解できる。

## 8行 するとい岸边

ガロンヌ川はボルドー市のあたりで大きく曲がっている。その湾曲を指すと考えることができるし、潮の満ち引きで急斜面に削られた岸边を指すとも考えられる。小径と訳したStegは、「栈橋」とも理解できるが、この場合、河川港ボルドーに接岸した船に渡す栈橋となる。ただし、動詞にはhin-「先へ」という延び行く動きを表す言葉があるので、その動きを遮る栈橋としてより、川沿いに続く「先へと」伸びていく小径と理解するほうがよいであろう。第2節第22行でもSteg「小径」が登場している。

## 11行 かしわと白楊 (ハクヨウ)

Eichenは「かしわ」とも「かし」とも訳せるが、ドイツをイメージさせる。Silberpappelnはウラジロハコヤナギやギンドロとも訳されるヤナギ科の樹木。ヨーロッパでは南部に多く、Eichenに対してフランス的なイメージを与える。とはいえ、「次善のもの」で描かれる南フランスの風景描写にも、「Eichenの丘」が登場する。その意味でEichenにドイツ的なものを読み込むのは、解釈しすぎかもしれない。別の読み方としては、Eichenに強さを、Pappelnにしなやかさや柔軟さを見、その調和を考えてもよいであろう。何よりも、この2つの樹木が「高貴 (edel)」とされ、「遠くを眺めている (hinschauen)」静止状態がそれまでの風景の動きと対比されている。

第1節の後半部は、川や小径の水平方向の運動、小川の落下の垂直方向の運動、さらには直立して見渡す木々の静止と観照 (テオリア) が交差するかたちで描かれており、第5節最後の「海」「愛」「詩」の3つの動きと対応すると考えることができる。

## 第2節

### 13行 今もよく思い出される

Noch denkt das mir wo[h]lは、スタンダードドイツ語では使われない表現で、das「そのことが」とものを主語にした自発表現。ヘルダーリンの出身地であるシュヴァーベン地方の方言と言われ、同地出身のフリードリヒ・シラー (1759-1805) などにも用例が

ある (StA II, 802-803)。思い出されているのは、まずは第1～2節の風景であろう。「私は思い出す」という「私 (ich)」を主体・主語とする表現ではなく、「そのことが私にとってよく思い起こされる」最終行にある「眠りへと誘う (einwiegend)」と呼応して、まどろむような淡い優しさが、第2節の特徴と言える。

## 14～16行 ニレの森 イチジクの木

第1節の樹木が、雄大な風景のなかの「高貴な (edel)」木々なのに対して、この節の樹木は人間の生活空間中の「水車」や「中庭」にあって、「枝を傾け」たり、「育つ」ような穏やかで優しい動きが特徴的である。イチジクは、『ドイツ民間信仰事典』によれば、豊穡さを象徴する木とされている。また、民間信仰ではいずれの木も雷から家を保護する木として理解されていた (Bächtoldt-Sträubli 1925, „Feige“ Bd. 2, Sp. 1304; „Ulme“ Bd. 8, Sp. 1293)。

イチジクの木については、同時期に書かれたと思われる「ムネモシュネ (Mnemosyne)」において、「イチジクの木のもとで／私のアキレウスが私にとって死んでしまった (Am Feigenbaum ist mein / Achilles mir gestorben)」(StA II, 198; MA I, 437) と語られるが、「追想」ではそうした英雄的な要素は感じられない。また、ヘルダーリンはエウリピデス『バッカスの信女たち』の翻訳で、聖所を似た綴りのイチジクと誤訳している。そこから、この「イチジク (Feigenbaum)」に神話的な意味を読み込む解釈も可能だが、そうするとニレの森が宙に浮いてしまうだろう。

## 17行 祭りの日に

ボルドーでは春3月22日前後に港で祭が開かれ、人びとは飲んだり踊ったり、食べたという (Lefebvre 2020, 56)。

## 18行 かの地の褐色の女たち

「褐色の (braun)」の肌の女性たちは、南フランスの光豊かな風土を想起させる。穏やかな木々の様子に対応するように、この節では女性たちが歌われる。後の節で歌われる「愛」の領域とつらなる。

## 19行 絹の大地を行く

ドイツ語を読むと、ここはauf seidnen Bodenとあり、絹の大地「の上へ」行くという運動の方向を表すとも読めるし、Bodenの複数形で変音しない例外的な場合 (本来はBödenが一般的な複数形) と考えて、絹の大地たち (複数) の「上を」行くと場所の意味でも理解できる。ここは、後者の場所の意味で読むのが適当であろう。「絹の」という形容は、触覚的な柔らかさのイメージを喚起している。

## 21行 夜と昼が同じになるとき

3月とあり、春分の頃だと分かる。なお、ヘルダーリンの誕生日は1770年3月20日。また、冒頭で引用され、かつ最終行でも引用されるオヴィディウスも3月20日が誕生日 (紀

元前43年）だった（Hirsch 2008/2009, 255）。そうした史実と同時に、「同じ」ことに均衡と調和のイメージが託されていることに注意したい。

「ライン（Der Rhein）」では、「そしてひととき運命はつりあう」、神々と人間の婚礼のときが歌われている（StA II, 147; MA I, 347）。

## 22行 ゆったりとした小径を

「ゆったりとした（langsam）」は、一般的には動きや歩みなどの緩慢さ、遅さやゆっくりとした様子を指すのに使われるが、ここでは小径がゆったりとした動きがあるものとして形容されている。女性たちのゆっくりと歩くさまがイメージできると同時に、第1節の「鋭い岸边」を伸びゆく小径のダイナミックな動きと対比されて、春の穏やかさのなかでの牧歌的な要素を感じさせている。

## 23行 黄金の夢も重く

フランスの研究者ピエール・ベルトーによれば、この表現はこの時期にボルドー周辺で松の黄色い花粉が漂う様子を指している（Bertaux 1969, 176-177）。

## 24行 眠りへと誘うそよ風が行く

第1節の北東の風がwehenという音を立てて強く吹き、「火のような心」と覚醒をもたらすダイナミックな風なのに対して、ここの風はLüfte「そよ風」であり、ziehenという穏やかな動きを表す動詞が使われ、眠りへと誘っている。また、第1節と第2節に共通する「小径」も、かたや「するどい岸边」を行くのに対して、こちらではlangsam「ゆったりとした」動きを示している。

この節の後半部では、音律にlángsamēn, góldenen, einwíegendeとダクテュルス（強弱弱：太字のアクセント記号つきが「強拍」、下線部が「弱拍」）が多用され、ゆったりとした雰囲気醸し出されている。

## 第3節

### 26行 暗い光に満ちた

この言葉は、まずはボルドーの赤ワインを想起させる。「ランダウアーに寄せて（An Landauer）」で「暗いワインと同様に 真面目な歌は喜びをもたらす」（StA II, 314; MA I, 328）と歌われている。ここでは、暗い（dunkel）と光（Licht）と相反するものを並置することで、ヘルダーリンの詩法のひとつである「調和的に対置されるもの」として描かれている。ヨッヘン・シュミットは、新プラトン主義の思想において、暗さと明るさの共存は神的なものの象徴として捉えられていることを指摘している（KA I, 1022）。また、ワインはディオニュソスを、そして最後の晩餐でのイエスを連想させる。ヘルダーリンにとってディオニュソスは革命の神（Böschstein 1989）でもあったし、イエスが古代の幕を引く重要な存在ではあるが、ここでは明示的に述べられていないことに注意したい。イメージを神話的な世界へ広げる方向よりも、個人の内面空間へと開く方向が意識されている。

## 27行 だれか 私に

この第3節でも、「私に（mir）」が使われている。ここでも主体の受動性が眼を引く。「だれか」はeiner「誰かひとりが」という不特定の存在を指している。不定冠詞に由来するこの言葉は「もしあれば」のニュアンスを含んでいて、そもそもそういう存在がいるのかも明らかではない。「手渡してくれ」という要請が満たされるのかも、やはり分からない。同じようにワインを手渡す場面は、「放浪者（Der Wanderer）」（第2稿）の最終節にあり、そこでも「私」はひとり（allein）なのだが、これから故郷へと帰ろうとしつつ、「それゆえ今 ライン川の暖かな山からの／ワインを杯の上まで満たして私に手渡してくれ！」（StA II, 83; MA I, 308）と歌い、神々や英雄たち、舟人たち、さらには親しい人びとのために飲もうとする。こうした高揚感とは異なった、沈んだ調子が「追想」では明瞭である。

## 28～29行 甘美なのは／木陰でのまどろみだろうから

「木陰でのまどろみ」は、第2節の「眠りへと誘うそよ風」と人間を守るように枝を伸ばすニレやイチジクに対応している。後期詩「巨人族（Die Titanen）」では、「休らいのときに／休息できるように、／死者たちを思うときを 与えよ。／多くの者が死んだ／いにしえには将軍たち／そして美しい女たちと詩人たち／そして新たに／男たちの多くが／私はだがひとりだ。」（StA II, 217; MA I, 390）と歌われている。「だろうから」と訳したのは、非現実を表す接続法が使われており、現実には与えられていないことを表している。

また「甘美な（süß）」は、後期に書かれた詩断片の通称「ティニアン（Tinian）」でも、「聖なる荒地をさまようことは／甘美だ」と歌われている（StA II, 240; MA I, 471）。

## 31～32行 死する思いに満たされて／心を失う

sterbliche[n] Gedanken（死する思い）のイニシャルは、ヘルダーリンの思い人であり、彼がボルドーから戻った直後の1802年6月にこの世を去ったズゼッテ・ゴンタルト（Susette Gontard）への思いだとする解釈がある（Bertaux 1975, 94）。「死すべき・死んでいく」思いとは、そうした思いを抱く人間に死をもたらすものであろうし、そうした思いそのものが永続性を持たないものだと言える。そうした思いに捕らわれることで、人は「心を失った」と状態だと解釈できよう。seellos「心を失った」には、シュヴァーベン方言ではruchlos「神を恐れぬ、不逞な」という意味もあるという。

## 32行 しかしよいのは

この詩において「しかし（aber）」が重要な言葉であることはすでに指摘した。aberよりも対立を明確にする「だがしかし（doch）」は、この詩のまさに中央となる位置で使われている。これまでのmir「私に（とって）」に代表される主観性の領域から、より広い世界へと展開するための転回点となっている。「心を失った（seellos）」＝「神を恐れぬ」と対比される「よい（gut）」は、語源的には「神の、神の思いに適う



(göttlich)」を意味している。これは、詩「パトモス (Patmos)」の最終節において、「確固たる文字が大切にされ／存続するものがよく (gut) ／読み解かれる」(StA II, 172; MA I, 453) ことを神が愛するとする表現に通じている。

### 33行 語らい

「追想」の転回点では、「言う」ことと「聞く」ことの相互的なコミュニケーションが「よい」こととされる。「語らい (Gespräch)」は、後期詩のひとつ「平和の祝祭 (Friedensfeier)」のなかで、「多くのことを(時代の) 朝から／私たちがひとつの語らい (Gespräch) であり 互いのことを聞いてから／人間は経験した。だが間もなく私たちは歌 (Gesang) になる」(StA III, 536; MA I, 364) と歌われている。「語らい」が人間のあり方そのものとして捉えられ、人間を作り、共同体を作る土台であるとされている。

また、「愛の日々」と「かつて起きた行い」が言葉として語られる。「愛の日々」は、第2節で歌われた女性たちにつながり、かつ第59行の「そして愛もまたせわしない眼をひきとめる」につながる。「かつて起きた行い」は、第4、5節の航海に出る男たちのイメージに、そして第57～58節の「記憶を奪いまた与えるのは海」につながる。過去の出来事が想起され、相互コミュニケーションのなかで語られること、言葉になることは、言葉を「とどまるもの」としようとする、最終行で歌われる詩人たちの行為へと連なっていく。

### 第4節

#### 37～38行 しかし友らはいずこに? ベラルミンと／その伴は?

ヘルダーリンの作品において、問いかけは作品の転回点をなす重要な意味を持つ。他には「ムネモシユネ (Mnemosyne)」における「しかしこれは何なのだ?」などが挙げられる。ここでの問いかけでは、第3節で歌われた「語らい」、そして「愛」と「行い」の領域にかかわる「友ら」の不在が浮き彫りになる。Bellarminは、ヘルダーリンの長編小説『ヒュペーリオン (Hyperion)』(1797/99)において、ギリシア人である主人公ヒュペーリオンが手紙を書く相手である。ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ (1749-1832) の『若きヴェルターの悩み (Die Leiden des jungen Werther)』(1774/1786) と同様の書簡小説で、主人公からの一方通行の手紙——ヴェルターは友人ヴィルヘルムに宛てて書き、ヒュペーリオンはベラルミンに宛てて書くが、相手からの返信はない（もしくは間接的にのみ語られる）——によって構成されている。そのため、ベラルミンがどのような人物なのかは不明である。想像できるのは、bell- が「よい」を、Armin は、古代ローマ軍を打ち破ったとされるアルミニウス (Arminius)、ドイツ語ではヘルマン (Hermann) を連想させることである。「よきドイツ人 (の英雄)」を意味する。小説中では、特に海との関連では語られていないものの、第5節の「男たち」も含めて考えると、船人としてイメージされていると考えられる。

#### 38～39行 多くのものは／源へ行くことを畏れる

「源 (Quelle)」がどこを指すのかは、必ずしも明確ではない。故郷＝ドイツと理解

する立場 (ハイデガーなど) がある。しかし、続く部分で「富」や「大地の美しいもの」を歌っており、その源泉へ行くことだとすれば、万物の源泉としての海を指していると考えてもいいであろう。この場合、航海の危険や孤独ゆえに海に向かうことを畏れると考えられる。

### 41行 画家のごとく

18世紀末に芸術事典を編纂したヨハン・ゲオルク・ズルツァー (1720-1779) は、地上の富を収集し所有することが困難であるため、「画家の技芸が我々の助けとなって、自然の富を楽しませてくれなければならない」(Sulzer 1793, Sp. 309) と論じる。世界規模での貿易や交流が盛んになるなか、世界の多様性を収集する役割を舟人が担い、かつそれを絵画として表現できる画家の存在がある。後期詩の断片には、「天は絵画が展示されたときの画家の家のよう」(StA II 1, 331; MA III, 225) という言葉がある。

### 翼の戦い

「翼の (geflügelt)」は、「翼のついた」を意味しており、帆船の波風との戦いとも、帆船同士の海戦の様子とも理解できる。ヘルダーリンの長編詩「多島海 (Der Archipelagus)」でも、おおよそ100～124行前後で古代ギリシアの諸都市とペルシアが戦ったサラミスの海戦 (紀元前480年) の様子が歌われている (StA II, 106; MA I, 128-129)。

### 葉の落ちたマスト

マストに葉がないのは当然だが、冬や死のイメージを喚起する。これは、第1、2節で歌われた自然の中の木々や人間の生活空間を守るように生えている木々と対比されている。そして「街の祝いの日も／絃楽も その土地生まれの踊り」もない。これは第2節で歌われた「祝いの日々」の様子と対比される。この節の後半部は「ない (nicht)」が3回繰り返され、幾年にもわたる孤独などが歌われる。「幾年も (jahrlang)」は、「ヒュペーリオンの運命の歌 (Hyperions Schicksaals Lied)」で、人間の運命として「どこにも憩うことができず」に「幾年も不確かさへと落ち行く」(StA I, 265; MA I, 744) ことが歌われているように、不安定さが続くイメージを喚起する。ドイツ語で読むと、行まきぎも不安かつ不安定なイメージを与える。

### 第5節

既述のように、本節は大きく3つの部分から成っている。(1) インドへと旅立つ男たち、(2) 合流して海に注ぐ川、(3) 3つの箴言、である。それぞれの部分を語句の変更による意味の変化を中心にまとめる。

#### (1) インドへと旅立つ男たち (48～49行)

第4節で歌われた友らの不在が、「インド人のもとへ」と明確な旅立ちとして語られる。

**48～49行 今やしかしインド人のもとへと／男たちは行った**

「今やしかし」と、視点は想像された航海の困難さから、男たちの旅立ちという現実的な視点へと戻る。「しかし（aber）」が覚醒の働きを担っている。最初の段階では「インドへと」と地理的方向だけの記述が、「インド人のもとへ」に表現に変わっており、人と人との結びつきをより強く予感させる。なおインドとは、アジアの東インドであるとともに、第1節で歌われた風のさらなる行き先である西インド、つまりアメリカ大陸も指している。また、主語は「友ら」から「男たち」に変更され、より成熟した英雄的な人物群像を想像させるように変更された。さらに「行く」を表す動詞も、もとはziehenという行列などにも使われる言葉（さらには第2節最終行でゆったりした風がそよぐ様を表現）からgehenに変わり、第4節の歌う航海の孤独感に合わせた表現になっている。

**(2) 合流して海に注ぐ川（50～55行）**

第1部の友らの出発のイメージに続いて、川の雄大な海への合流が、終末ではなく、やはり出発と解放のイメージで語られる。

**51行 あの風強き岬のところ**

この部分は、岬で川が海へと注ぐ場面である。ドルドーニュ川とガロンヌ川の合流点は、ボルドーからガロンヌ川を20kmほど下流の地点にあり、鋭角の「風強き」岬ベック・ダンベ（Bec d'Ambès）となっている。ここからさらに75kmほど流れて大西洋に注ぐ。合流すると、ジロンド川と名が変わる。この名前を詩に出さなかったのは、フランス革命におけるジロンド派という明らかに政治的なイメージを喚起することを避けたためであろう。

**56行 川は流れ出る**

最初の段階では、川の流れが海で「終わる（sich endigen）」だけだったのが、「出て行く（ausgehen）」という出発のイメージも含む表現になった。また、「光り輝く、壮麗な（prächt[i]g）」ガロンヌ川の光と明るさは、第3節や第4節の暗さや闇の対極にあり、生を象徴しているようだ。

なお、第1部の男たちの旅立ちも、第2部の川が海に注ぐ様子も、gehen「行く」という動詞で表現されている。この旅立ちと別離という去り行く動きに対して、最後に詩人たちの行為が対置されることになる。

**(3) 3つの箴言（56～60行）**

第3節では、語らいと「愛の日々」と「かつてあった行い」について聞くことがよきものとして語られていた詩を締めくくる4行は、英雄的行為、愛の世界が語られた後に、それらに「思いを寄せる」ことから生まれる詩作の世界を歌う。

**56～57行 記憶を奪いまた与える／のは海**

ゼッケンドルフ以降のほとんどの版では、第5節が11行で構成されてきた。ここでは、

手稿とヘルダーリンの厳密な構成意志を根拠に、「記憶を奪いまた与えるのは海だ」は、独立して2行としつつ、他の4節と同様の12行とした。海は舟人らの航海や英雄的な行為（例えばオデュッセウス）の領域である。この領域は、第4節で歌われたように、美しいものを集めたりできる「与える」領域であると同時に、死の危険と隣り合わせの「奪う」領域でもある。生と死が隣り合わせでありつつ、それらを大きく包む場として描かれている。

**59行 愛もまたせわしない眼をひきとめる**

この文からは、「せわしない、熱心な（fleißig）眼」という英雄的な行為に没入する存在に安らぎをもたらす「愛」をイメージすることができる。なお、従来の版では、ゼッケンドルフ版での語句「愛もまた熱心に（fleißig）眼をひきとめる」と、fleißigは副詞とされ、その主体は「愛」だとされてきた。しかし、ここは冒頭の「そして」と「もまた」という言葉から、海と同様に愛も、英雄的な行為を大きく包み込む主体として理解できるのではないか。「海」も「愛」も、人間の営為、行為を大きく包む領域として語られている。

**60行 しかしとどまるものを打ち建て残すのは詩人たちだ**

全60行の詩を締めくくる言葉は、行為や愛を言葉として後世に残す詩人たちの仕事を歌って終わる。「打ち立て残す（stiften）」は、詩作を「創り上げる」と同時に、それにより「後世にメッセージを手渡す」ことを同時に指す言葉である。現在のドイツ語では「財団（Stiftung）」にその意味が残っているが、キリスト教の文脈では、自らや家族などの死後の生を確実なものとするために財産などを寄進することがもとの意味にあった。この詩行は、忘却や死の運命を超えて、言葉として行為や愛そして詩作が残され、永続することを歌う。オヴィディウスの『愛の歌』第3巻第9歌にある「生き残るのは詩人の作品（Durat, opus vatum）」と共鳴する。ただし、オヴィディウスの言葉が単数の詩人を指すのに対して、「追想」では複数の「詩人たち」の行為が歌われていることに注意したい。前半部では、「私にとって（mir）」という言葉が特徴であり、個人的な領域での追想が語られていた。それに対して後半部では、語らいの大切さや舟人たちの様子が語られ、行為と愛を残るものとする詩人たちの歴史が振り返られる。この詩行をハイデガーのように「詩作は存在の樹立」（Heidegger <sup>2</sup>1951b, 38）と見たり、詩人が意識発展の最高の段階に到達しているとして詩作の上位性を高らかに宣言するものと見るヨッヘン・シュミットも解釈もある（KA I, 1018-1019）。他方で、「とどまるもの」を「残った（余りの）もの」と見て、詩的主体が「自己忘却」に陥り、「衰弱」を見せているとするローラント・ロイスの解釈（Reuß 1990, 338-340）もあるし、「とどまるもの」を忘却と消滅にかりうじて抗した遺されたもの（TL, 1545）と見る立場もある。